講演企画委員会だより

春季大会最終日に，座長および有志の方々の参加を得て「将来のための反省会」を行なった．任期も終りに近づいたので，この2年間の経過を振り返るとともに「反省会」で述べられた意見を集約し今後の参考に供したいと思う．

今期の運営で試みられたのは主に次のような点である．

1．original paper を募集して行なわれていた春と夏の講演会をシンポジウム形式とし，内1回を地方で開き，地方支部独自の取組みを援助するよう心掛けたこと．

2．大会を昔のように3日3会場に戻したこと．1講演を15分以内に制限したかわりに各セションの終りに総合討論（質疑）の時間を設けて討論の活発化を図ったこと．

3．シンポジウムを a）総合報告型と b）original paper 型に性格をはっきりわけ，b）についても試みたこと．

4．大会の講演申込みの際の講演要旨を廃止し，希望部門の分類を設けてセション編成の参考にしたこと．

5．大会の折，時々インフォーマルに開かれていた「地方における調査研究」のミーテングを学会の正式の討論会として取り挙げ，それを受けて地方の調査研究のためのシンポジウムを開いたこと．

大体以上のようになると思う．「反省会」では a）は大会の運営，b）研究発表の内容の評価の問題，c）予稿集について，d）シンポジウムの位置づけ，というような点について意見を出していただいた．要はどうしたら大会が一層活発におこなわれるかということである．

a）については主にセションの分類および総合討論（質疑）について意見がかわされた．今の分類は主に現象のスケールで行われている．しかし研究発表の内容が多岐にわたり，現在の方法では不充分な面が出て，講演者の希望に反する面もみうけられたということである．1つの提案として大気物理，天気予報，応用気象という3本の柱で分類してはという提案もあったが，セションの分類の目的のために（印刷不要）講演要旨を復活する必要があるのではないかということであった．いずれにしても今後会員の意見を大いに求めたい所である．総合討論（質疑）については大体肯定的な意見が出された．これを更に有効に生かすため key speaker を設けるとか，そのセションのレビューをする依頼発表者を設ける等の工夫が有効ではないか．これは専門分野以外の動向を把握するのにも役立つのではないか．ただセションにより特性があるので，発表の順番，講演時間，総合討論等を含め，運営を全部座長にまかせ座長の自由裁量を大幅にふやすのが望ましいとの意見が述べられた．b）については，大会では発表に対する卒直な批判というか討論の雰囲気が乏しいのではないかということから，これをおぎなう意味も含めて「反省会」を開いたわけである．しかしこれについては，論文の段階で critical な評価を受けるし，討論の多少も関心或いは評価の目安ともなりうる．参加者それぞれが評価しているので，座長の役割ではないという見解が示された．c）の予稿集については，大会の2ケ月位前に締切ることから予稿内容と発表内容の喰い違うものが見受けられること，また価格もかなり高いことから若干の批判もあり委員会として参考意見を求めたものである．特に意見は述べられなかったが委員会としてはこの制度は当面継続し，発表者の努力で内容豊かな予稿集を作るべきであると考えている．d）については特に問題点は指摘されなかった．ただ大会では総合報告型，専門的なものは講演会でということになり易いのではないか．いずれにしても性格をはっきりさせ，大会で専門的なものを取り上げる時は3会場で並列に開くということも考えてはという意見もあった．

この他発表技術については，オーバーヘッド・プロジェクターの採用，天気の講演プログラムの印刷を新聞のテレビ番組のような配列にする等の工夫があってもいいのではないかというアドバイスもいただいた．

今期の経過をふり返り，また「反省会」で出された意見を集約するとともに，会員の皆さんの批判と意見も得て，新しい委員会の下で活発な運営がなされていくことを期待する次第である（6月11日）．